

3.7 ベンチマーキング試行結果の総括

3.7.1 ベンチマーキングの意義

今回、国際的な大学ベンチマーキングを特に教育面に注目して試行したが、改めて大学ベンチマーキングの意義を振り返ってみる。

いわゆる「大学ランキング」が、比較的多数の大学を対象に、様々な指標を用いながら、最終的には一定の尺度によって大学の順序付けを行うこと目的としている。一方、「大学ベンチマーキング」は、その目的達成に適した比較対象大学を選定した上で、大学間の詳細な比較分析を行うことで、大学の特徴（強み・弱み）を抽出することである。

数値化不可能な指標を分析できない「大学ランキング」と異なり、「大学ベンチマーキング」では、順序付けを目的としない以上、定量的・定性的いずれの指標でも扱うことができる。大学活動には数値化困難な部分が多く存在することを考慮すると、強み・弱みを抽出するにはベンチマーキングにより数値化不可能な情報をむしろ積極的に活用・分析することが重要であり、今回の試行においてもそのような有益な情報を得ることができた。

3.7.2 ベンチマーキングの実施方法に関する提言

大学ベンチマーキングに取り組みたいと考えている大学関係者に対して、今回の試行から得られたベンチマーキング実施のポイントを提言としてまとめる。

(1) ベンチマーキングの目的を事前に明確化する

大学ベンチマーキングでは詳細な比較を行うため、比較分析に擁する人的・時間的コストが大きくなる。分析目的（何を明らかにしたいのか）を明確にした上で、その目的を達成するのに最低限必要な指標・データを特定する必要がある。

(2) 相手大学との直接のディスカッションの場を設定する

相手大学の情報をどれだけ集めても、それを自分達だけで分析しては「一方向的」な見方に留まってしまう。収集した情報を基に相手大学の関係者とディスカッションを行うことで、集めた情報から相手大学の問題意識や特徴等が浮かび上がり、相手大学からの指摘を通じて自分達が気づかなかった自大学の問題や特徴が明らかになる。このような大学関係者同士がディスカッションする場の通じての「発見」がベンチマーキングを実施する上で重要である。

(3) 自大学の情報を積極的に相手大学に提供する

前述のようにベンチマーキングは相手大学との「共同作業」である。共同作業を成功させるためには、一方的に相手大学の情報を収集するだけでなく、自大学の情報を相手大学に提供し、相手大学の前向きな協力を得ることが重要である。自らが相手大学に提供した以上の情報が、相手大学から得られることはないと認識し、自大学の情報をできるだけ相手大学に事前に提示し、問題意識を共有していくことが重要である。

(4) ウェブサイトで自大学の情報公開する

今回、欧米大学のウェブサイトについて詳細な部分まで調査を行ったが、各大学のウェブサイトは非常に充実しており、直接ディスカッションする前に相当量の比較分析を行うことが可能であった。今後、ベンチマーキングを実施したいと考えている日本の大学においては、自大学の情報をウェブサイトで積極的に開示することで、大学ベンチマーキングに関心を持っている他大学の関心を集めることも重要なことであろう。

3.7.3 教育ベンチマーキングにおける学生視点の抽出に関する提案

今回、カリキュラムを中心に教育活動に関するベンチマーキングを実施したが、別の方法として学生視点に着目したベンチマーキングを最後に提案する。具体的には、

- ◇ 教育の評価指標は各大学（学科）が掲げる教育目標を「評価軸」として、その達成状況を測るためのものであるべき。
- ◇ 教育の評価指標は実際の教育改善方策の検討につながるような示唆を得られるものであるべき。

という視点から、教育活動の重要なステークホルダーである学生を取り込んでいく方法について検討する¹。

(1) 基本的な枠組み

各大学、あるいは各学科が掲げる教育目標は、ディプロマ・ポリシーあるいはカリキュラム・ポリシーとして具体化することが求められている。各ポリシーの表現や精緻度合については大学毎（学科毎）に様々であるが、国内大学においては、今後、学生が卒業する際に身に付けるべき能力²を具体化する方向にある。ここでは、大学（学科）が学生が卒業時に身につけるべき能力を「学習到達目標」として具体化していると想定し、この「学習到達目標」の達成状況について、以下の方法による指標化を検討する。

- ◇ 最終的（卒業時）に学習到達目標をどのくらい達成したと感じているか
- ◇ 学科が目指している学習到達目標を学生がどの位、重要と感じているか
- ◇ 個々の授業科目が学習到達目標の達成にどれくらい寄与したか

¹ なお、以下では学科単位での教育ベンチマーキングを想定している。

² 例えば、中央教育審議会では、学生が学士課程（学部）を卒業する際に身に付けるべき能力を「学士力」と定義し、各学部ごとに学士力を具体化し、教育の質を保証する取り組みを策定するよう提言している。

(2) 具体的な流れ

(a) 最終的（卒業時）に学習到達目標をどのくらい達成したと感じているか

卒業間近（あるいは直後）の学生を対象に、各「学習到達目標」について、達成度の自己評価をアンケートする。達成度の基準は、「学習到達目標」の段階でできるだけ具体的に定義しておくことが望ましい。

(b) 学科が目指している学習到達目標を学生がどの位、重要と感じているか

同じ学生を対象に、各「学習到達目標」について、学生自身がどの程度、重要と感じていたか（重要性の認識度）を複数回答式でアンケートする。

表 3-46 学習到達目標の達成度の自己評価イメージ

		達成度 (%)	重要性の認識度 (%)
基礎力	専門学力	67	—
	理論解析力	80	—
	シミュレーション能力	65	—
	実験計画・遂行力	80	—
	プロジェクト遂行力	74	—
問題に対する	発見能力	74	100
	解決能力	57	100
最適解を見出す力		75	95
学際力(専門分野以外への理解力)		57	99
チーム力(メンバーとして能力を発揮する力)		70	99
国際コミュニケーション	英語でのコミュニケーション力	44	99
	国際的能力	46	97
日本語力	文章表現力	76	97
	コミュニケーション力	84	100
	プレゼン技能	87	99
情報力	ツール類の活用力	86	—
	情報収集能力	86	98
工学・技術者倫理		60	90
自己研鑽・啓発の習慣		68	96
自己学習のための総合(基礎・知識)力		78	100

(c) 個々の授業科目が学習到達目標の達成にどれくらい寄与したか

同じ学生を対象に、各「学習到達目標」の達成に最も寄与したと思う授業科目（能力獲得に貢献したと思う授業科目）を複数回答式でアンケートする。その度数を見ることで、各授業科目がどれくらい「学習到達目標」の達成に寄与しているか、学生の評価を得ることができる。

表 3-47 学習到達目標への授業科目の貢献度の自己評価イメージ

	研究 (室) 活動	講義	演習	実験	輪講	課外活 動	アルバイト	他機関
問題発見力	100		12	58		17	14	
問題解決力	93		12	50	14			
チーム能力	79		9	32	13	39	18	
日本語コミカ	93				34	15	16	13
プレゼン力	95		9		37	9		8
情報収集力	92	14	11	20	18	10		8
倫理感	84	38		25		12		11
自己研鑽	80	36	29	24		22		21
	研究 (室) 活動	留学 体験	留学生との交流	海外体 験	課外活 動			
国際力	66	26	60	59	10			

能力獲得の手段： % 複数回答

(d) 他大学（他学科）とのベンチマーキング

以上は、一つの大学（学科）内での教育に関する評価であったが、学習到達目標が共通であれば、（あるいは学科の目標とは別途、共通目標を新たに設定すれば）大学間（学科間）でのベンチマーキングが可能である。

その場合、例えば、「学習到達目標」自体の重要度について比較することで、各大学（学科）に在学している学生の教育動機の違いも明らかにすることができる。

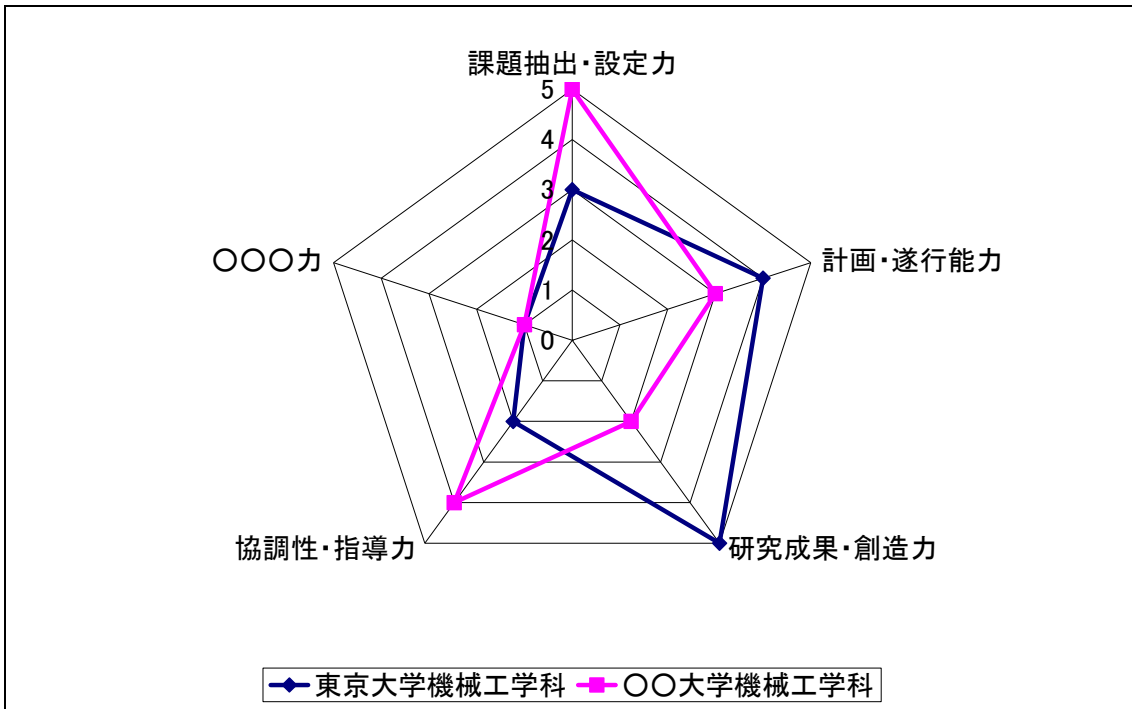


図 3-35 学習到達目標の大学間の比較分析イメージ

以上、教育指標の一案として、学生へのアンケートによる教育目標の到達度に関する評価指標について提案したが、詳細な方法論や実施において解決すべき課題等については更なる検討が必要である。

4. おわりに

今回、特に教育活動について国際大学ベンチマーキングを試行した結果、導入教育や大学院でのコースワーク、少人数教育の実施状況、研究指導（卒業論文など）の方法といった従来の「大学ランキング」では決して表に出てこない、大学教育において重要な論点について活発な議論を行うができた。

このようなベンチマーキングは、相互の大学教員がそれぞれの大学についての資料を持ち寄り、長時間の資料精査の上で始めて明らかになることと思われていたが、今回、欧米大学のカリキュラム比較を試行する中で、各大学のウェブサイトでカリキュラムの詳細について全学的に整備・公開されている例も多く、これらを活用するだけでも、かなりの情報を引き出すことが可能であることが明らかになった。

特に米国大学では、各科目の単位数・授業時間といった基本項目だけでなく、講義内容や推奨テキスト（教科書、参考書）、成績評価方法など多くの項目が公開されており、これらを整理するだけでも、自大学について具体的な示唆を見出すことができる。

国内でもシラバスなどを公開する大学は増加しており、カリキュラムのベンチマーキングは個々の大学が独自に実施可能な状況になりつつある。教育の質向上やカリキュラムの改善が叫ばれるようになって久しいが、今回のベンチマーキング試行が、そのための資となれば幸いである。